

速報「青葉学園蛇体園舎跡に到達」

大滝会特別会員 鹿摩貞男

はじめに

先に（平成 29 年 7 月 16 日）大滝側から青葉学園蛇体園舎跡を目指したが今一步のところまで到達出来なかった（『青葉学園跡探索記』<http://ootaki.xsrv.jp/aobatansaku.html> 参照）。

今回（平成 29 年 11 月 12 日）は、茂庭側から青葉学園蛇体園舎跡を目指し目的地に到達することができたので報告する。

（巻末「青葉学園蛇体園舎跡関連図」参照）

烏川林道

烏川林道の終点近くに「枯松支線」との分岐点になっているところがある。分岐点の右側が「枯松支線」ですぐ先に林道橋「烏川橋」（昭和 51 年 9 月完成）があるけれども、その先は完全に山に戻っていて林道の面影はなくなっていた。（写真-1①～③）



写真-1① 林道分岐点。右側林道枯松支線、すぐに林道橋烏川橋(S51.9 完成)その先はブッシュ。左側本線烏川林道この先約 200m で終点。



写真-1② 烏川林道「枯松支線」烏川橋(S51.9 完成)左岸から望む。

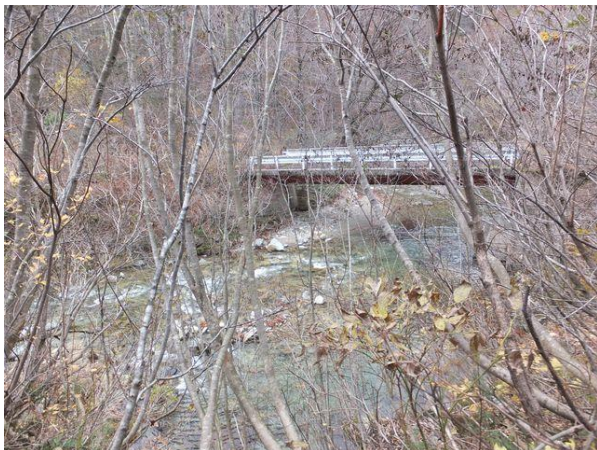
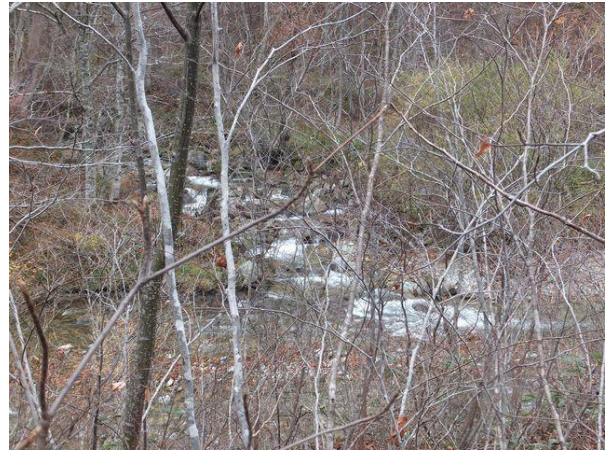


写真-1③ 林道枯松支線、すぐに林道橋烏川橋(S51.9 完成)

分岐点の左側が烏川林道本線で、道路の形は確認出来るもののこちらの方も山に戻っていて完全なブッシュとなっている。ブッシュの中を烏川沿いに 100mほど進んだ所で大きな沢が勢いよく流れ込んでいるのを対岸（左岸）に見ることができた。これこそがとにかく一度は見たいと思っていた「枯松沢」であろう。雑木に邪魔されこの時期でないと対岸からはほとんど見えないと思われる。（写真-1④⑤）



写真一④ 分岐点から烏川林道本線に入る。

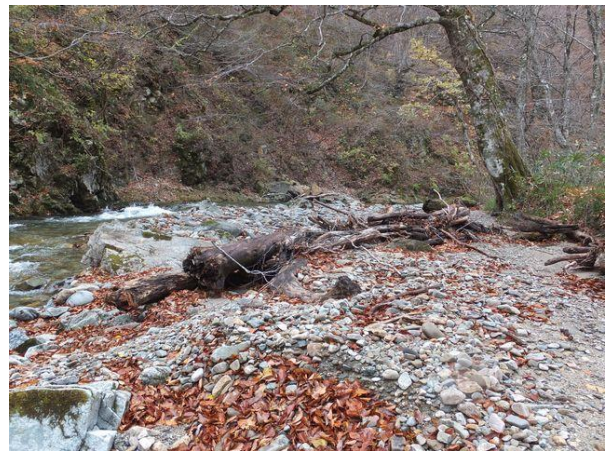


写真一⑤ 烏川左支川枯松沢

そこから 200mほど進んだところで林道はなくなっていて、多分烏川林道の終点である。これはもちろん予定通りで、森林計画図(*)において確認しているところである。筆者の想定では、その先にかつて蛇体道と呼ばれたなにがしかの山道が続いているはずで、すぐにでも右岸側（左手に）に蛇体鉞山跡がありその向いに青葉学園跡があるはずであった。しかし、林道終点から少し進むと烏川右岸の崖に出て進行方向左側（右岸）は急勾配の崖が続いていて道路はもちろん鉞山跡などあるはずがなくまさに想定外であった。これは、地形図を注意深く見れば崖記号が表示されていてすぐ分かることであったと反省している。ただ、その向い左岸にはそれらしい平地が見えていた。(写真一⑥)

(*) 森林計画図：関東森林管理局の「阿武隈川森林計画区第5次国有林野施業実施計画図（平成26年度樹立）」（2万分の1。以下「森林計画図」）

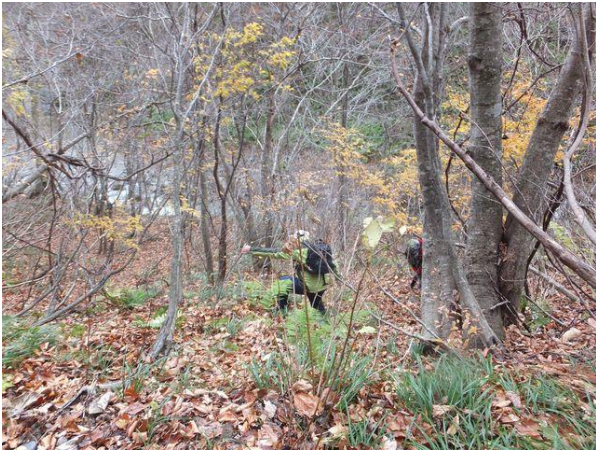
ともかくにも左岸側にある青葉学園跡に近づいていることは間違いないはずで、こうなると烏川に降りていくほかはない。浅瀬を見つけ渡河を始める。その渡河箇所（左岸）は確かに平地になっていたがそれらしき痕跡はなかった。烏川の形状やあたりの雰囲気はそれらしきところではあるが学園跡ではないことは確かだ。そこで dark さんとおばらさんは上流へ、山口屋さんと筆者は^{そまみち}杣道（きこりが通るみち）らしき道を辿りながら下流側にそれぞれ行ってみた。筆者等が向かった下流側にはそれらしきところは全く見つからず渡河地点に戻った。(写真一②①～③)



写真一⑥ 渡河地点から上流側を望む。道路があるはずの右岸(写真左側)は崖。

青葉学園蛇体園舎跡へ

そこでおばらさんが待っていて上流側で青葉学園跡を発見したという報告を受け早速上流へ向かう。藪の中や河原・川の中を 0.5km ほど進んだ所で右側（左岸）に比較的広い平地があるのが見え、左側には急斜面（崖）の川岸とその上に峰が続いているのが見えた。烏川の屈曲や流れの状況などが『青葉学園五十年の歩みと三尾砂』（社会福祉法人青葉学園、平成8年6月 以下『50年史』）でみた写真や絵画を彷彿とさせるものがある。



写真一2① 烏川林道の先に道なし。烏川へ下りる。



写真一2② 烏川へ崖を下る。

結局枯松沢から青葉学園跡までは0.8kmほど（簡易距離計による推測値、以下同じ）来たことになり、筆者が想定していた距離200～300mとは大幅に異なる位置にあった（これは大滝会の方々の証言を基にした想定であった）。枯松沢（烏川林道終点付近）から蛇体鉦山まで少なくとも山道（林道など）があるものと思込んでいたのであるが実際はなかったわけで、地元の方に教えて頂いた蛇体鉦山～枯松沢の距離200～300mは実際に歩いた記憶に基づくものではなかったようである。今回実地に確認出来て良かったと思う。かつて、大滝から蛇体道を通って茂庭まで行っているが、青葉峠で蛇体鉦山の方に下るのではなく、そのまま北上し（営林局歩道：大滝線）烏川林道に出て行ったのかも知れない。茂庭へのルートは、これまた新たな謎になる。



写真一2③ 冷てえー、烏川渡河。

(写真一3①～③)



写真一3① 渡河地点から上流へ向かう。
左前方、青葉学園所跡所在、旧鉦山敷地（河岸段丘）が見える。



写真一3② 旧鉦山敷地、下流側から望む。

ここで児童養護施設青葉学園が創設された蛇体園舎について若干触れておく。昭和21年（1946年）5月、旧蛇体鉦山の事務所・飯場（作業員宿舎）として昭和18年頃まで使用されていた建物群を三尾砂氏（国語学者・ローマ字教育学者）が購入し、その中で比較的しっかりしていた事務所部分を青葉学園蛇体園舎の住居棟及び教室としたものである。



写真-3③ 烏川の河岸段丘と思われる旧鉦山敷地の下流端。下流側を望む。

蛇体鉦山は烏川右岸の傾斜地にあり、事務所などの建物を建てるスペースはなく、対岸（左岸）にある比較的広く平坦な河岸段丘（以下旧鉦山敷地という）を利用し事務所や飯場を設けていたが昭和18年頃閉山したと思われる。この旧鉦山敷地（河岸段丘）の標高は540m程度のように、地形図（2.5万分の1）の等高線530～540mの間隔の広がっている所がその敷地であろう。現地でのGPS測定では、烏川面から5mほど高くなっているようで、烏川の上流部であるこ

とから出水時でも敷地まで水が上がるということはないであろう。描かれた絵画を見ても川岸の建物は高い位置にある。

(写真-4①②③)(参考写真-1)



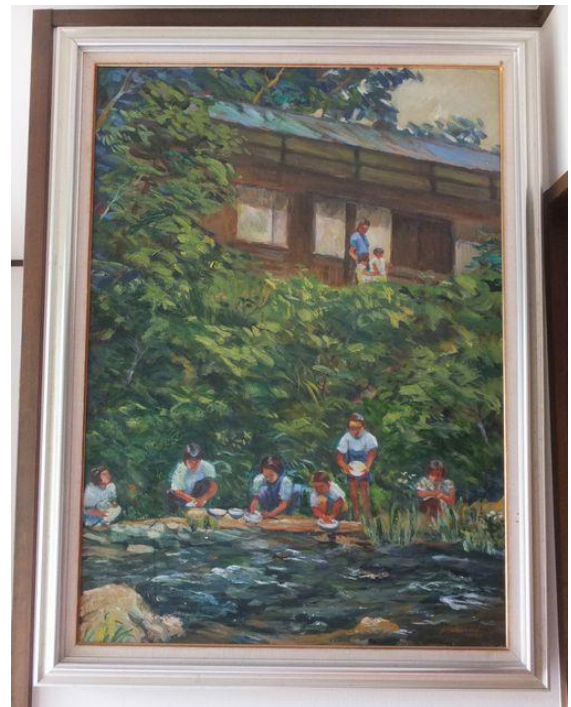
写真-4① 園舎(住居棟)付近から上流側を望む。



写真-4② 園舎住居棟(右上)付近から上流側を望む。



写真-4③ 園舎住居棟付近から下流側を望む。



【参考写真-1】 青葉学園蛇体園舎絵画 昭和21年 青葉学園様提供(たんぼぼ館)

旧蛇体鉱山は、旧国道 13 号大滝集落の西外れ旧西川橋付近から蛇体道と称する鉱山道路を 6 km ほど入った地点にあったものである。

さて青葉学園蛇体園舎があったと思われるその旧鉱山敷地（河岸段丘）に上り上流側へ進むと最初に目についたのは柵状の四角のコンクリート（鉄筋あり）構造物である。川岸の直上にありメジャーもなく寸法は測り損なったけれども縦横四方 1.5m 前後はありそうで、高さも 1 m 近くあると思われる。中は落ち葉に埋まっていたけれどもその底に鉄板が見えた。南側の下部には焚きだし口と思われるものがあり底板の鉄板が崩れ落ちていた。明らかに風呂、それも五右衛門風呂の一種であると思われる。また、この風呂から右斜め方向（上流側南西方向）2、30 メートルのところにはトイレ跡らしき小さな集水柵（石積）らしきものが見られた。

(写真-5①~③)(写真-6①~④)



写真-5① 烏川の河岸段丘と思われる旧鉱山敷地（青葉学園蛇体園舎跡）全景、下流側から望む。



写真-5② 下流側風呂場（畑）付近から上流側園舎住居棟跡（手前）、教室跡（奥）を望む。



写真-5③ 風呂場付近から旧鉱山敷地下流側を望む。



写真-6① 風呂遺構



写真-6② 落ち葉の中、僅かに底板（鉄板）が見える。

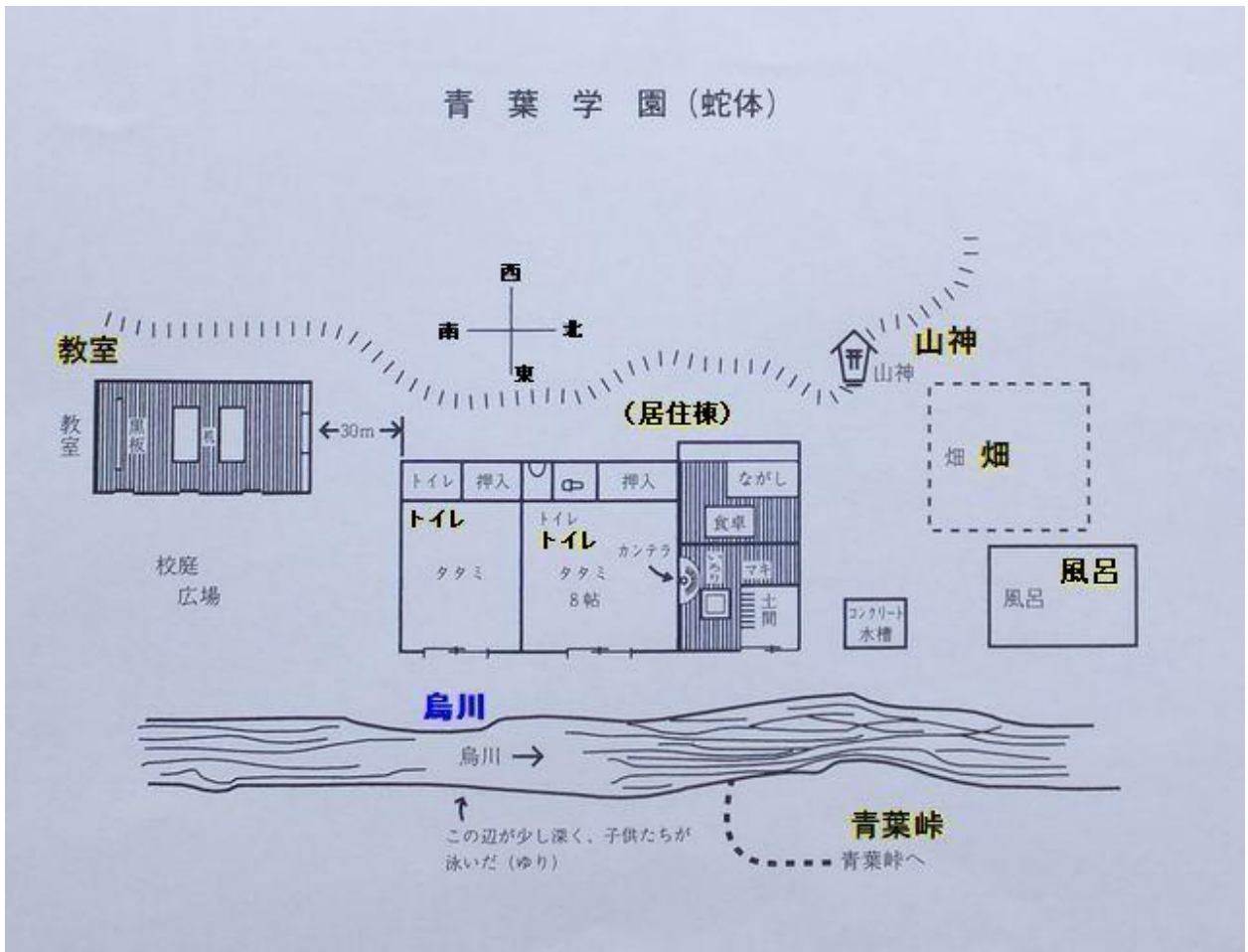


写真-6③ 風呂の焚き口、崩れ落ちている底板(鉄板)。いわゆる五右衛門風呂の一種であろう。鉄筋が見える。

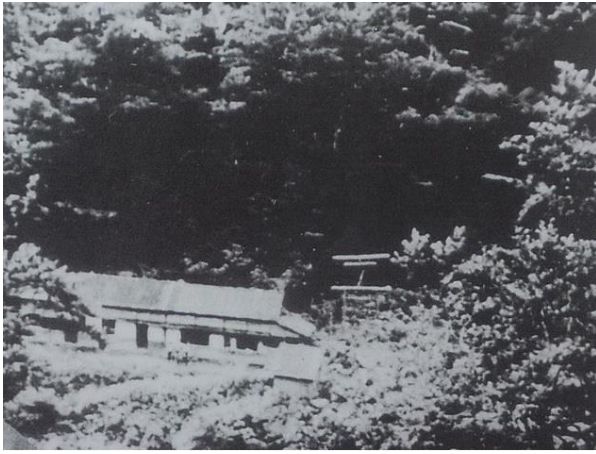


写真-6④ トイレ跡か

当時の学園の配置図(参考写真-2)を見ると住居棟に並んで水槽と風呂が描かれている。また当時の建物(住居棟)写真(参考写真-3)を見ると、川岸の直上に小屋(多分風呂場)が建っていて、水槽らしきものがその隣に見える。その水槽は低い位置にあり、ある程度の高さがある今回のお風呂遺構とは別であるように思われる。風呂とトイレの位置関係も配置図から見ると現地の状況は大体合っているようにみえる。建物写真と配置図にはズレがあるようにみえるが写真の撮影方向や記憶による配置図であれば許容範囲であろう。また水槽らしきものが何で出来ているかは不明である。現地を確認した限りではその水槽の遺構は見当たらなかった。



【参考写真-2】 青葉学園蛇体園舎配置図。青葉学園提供(『50年史』、一部加筆)



【参考写真-3】 青葉学園蛇体園舎(居住棟)。中央手前の小さな建物は風呂場であろう。その左側に水槽のようなものが見える(黒い部分)。青葉学園提供(『50年史』)

ところでこの風呂については、青葉学園では実際は使用されなかったようである。「蛇体の風呂については、鉦夫三〇人がいた頃の、部屋の半分くらいの大きいコンクリート製のものがあつた。しかし、烏川から水を汲んで入れることも容易には出来ないし、薪もないので、皆は行水を使っていた。建物は沢山あつたから、これをこわしてたき木にして、行水のお湯を湧かしたのである。」(『50年史』78頁)と記されている。しかし、その使われなかった風呂が今となつてはほとんど唯一の遺構であることは皮肉な話しではある。

この風呂遺構の上流側では、蛇体園舎の住居棟跡を偲ばせる前述のトイレ遺構のみが残つて

いた。風呂場から北側には山神様が鎮座していたようだが今は何もない。また、住居棟部分から30m西側には教室が建つていたようであるがその痕跡も全く見つけることは出来なかつた。その教室の東側(川側)は、校庭広場となつているが若干狭いように感じた。また、風呂場のところには、作物が良く育つたという畑があつたという。畑は、旧河川敷であるから肥えていたのであろう(前回報告では枯松沢の氾濫原ではないかと言及していたが全くの見当違い)。

敷地ではその他に、耐火レンガと覚しき破片や古いビンなどが僅かに見られた。それにしても建物のカケラくらいはあるだろうと思つて期待していたけれども見事に何もない。建物の基礎なども見あたらなかつたけれども埋まつているのかも知れない。山神さまは影も形もなかつた。72年の歳月はあまりにも長いとはいへこんなにも何かもなくなるものなのであろうか。

(写真-7①②)



写真-7① 謎のレンガ破片



写真-7② 山神様跡付近(中央)を望む。

昭和21年(1946年)10月三尾砂先生達がこの地を去つて今年(平成29年(2017年))で72年目、先生や若い生徒達がこの山奥で学び生活をしていたことを偲び、今その地に立つことができ感慨一入(ひとしお)だった。食料の確保一つを考えても大変なご苦勞があつたようで、『50年史』

(60頁)で伝えられている楽しそうな学園生活は、深い谷底の鬱蒼^{うっそう}たる林に覆われた周りの山々を改めて眺めてみたときに正直いつて筆者にはやはり想像出来かねるものがある。

この福島県の人知れぬ山奥で戦後の大混乱の中、新生日本に新しい文化を創造しようと、困難な道を選び活動された方々がおられたということを忘れてはならないだろう。

蛇体鉦山

ところで今回の探索行の目的の一つに、青葉学園の対岸にあった蛇体鉦山跡の確認がある。今回、時間の関係もあり対岸に渡り実地に調査出来なかったけれども、対岸から見る限りそれらしい明確な遺構は確認出来なかった。青葉学園の頃は山の中腹に坑道跡が見え、機械設備などの一部が残存していたようで、園児たちはそこでよく遊んでいたという（前掲書 48 頁、59 頁）。また、大滝会の方の話によれば戦後鉦山の残存設備があるのを見たという。今回、直接の鉦山遺構は見る事ができなかったけれども、想定鉦山位置下流の川の中に謎の残骸（鉄骨部材）が確認されており、それらの設備の一部の可能性はあるだろう。また、風呂場遺構については青葉学園遺構というより、むしろ蛇体鉦山（飯場）遺構というべきなのかも知れない。（写真-8①②）



写真-8① 林の奥は蛇体鉦山跡か。



写真-8② 謎の残骸（鉄製部材）。蛇体園舎居住棟付近、下流側から撮影。

なお、蛇体鉦山の鉦山道路（蛇体道）も青葉学園側からは確認出来なかった。青葉峠から鉦山までの道路は、通称七曲と云っていたそうで大変な急坂であったという（大滝会証言）。当時の生徒がその七曲坂について次のような手記を残している。

「初めは割りにゆるやかな勾配なのだが、下り行程の半ばあたりにさしかかると、あとは、谷川までに行くのに、なり振りかまわずといった急激な勾配となり、岩につかまり、道の傍らの伸びている木の枝につかまりといったことを余儀なくされてしまうすごい道になる。下りるのが怖い箇所も出てくる。逆に、ここを登るときは、胸や顔に、坂や岩がつきそうになる急坂なのだ。」（『50年史』43頁）。

大変な七曲坂であったようだが今回確認は出来なかった。しかし学園側から対岸を見たとき高い峰が谷となって眼前に迫っていて、そこに道路があるとすれば手記に記された状況になるであろうことは十分に想像できる。かつて、掘り出した鉦石を、多分カマス（藁で作った大きな袋）に入れてその七曲坂を運搬したであろうことを考えると大変な苦労があったと思われる。

（写真-8③）



写真-8③ 青葉峠を望む。

終わりに

旧鉾山敷地・青葉学園蛇体園舎跡には小一時間ほど滞在し帰路についた。今回の探索行には、山口屋散人さん、dark-RXさん、猫旅おぼらさんそれに筆者の4名の参加でした。皆さんには大変お世話になりました心から感謝申し上げます。掲載写真は4名によるものですが、速報版につき提供写真にクレジットタイトルは省略してあるのでご了承ください。

青葉学園や蛇体鉾山について興味を持たれる向きには冒頭のウェブサイト

(<http://ootaki.xsrv.jp/aobatansaku.html>) を参照してください。

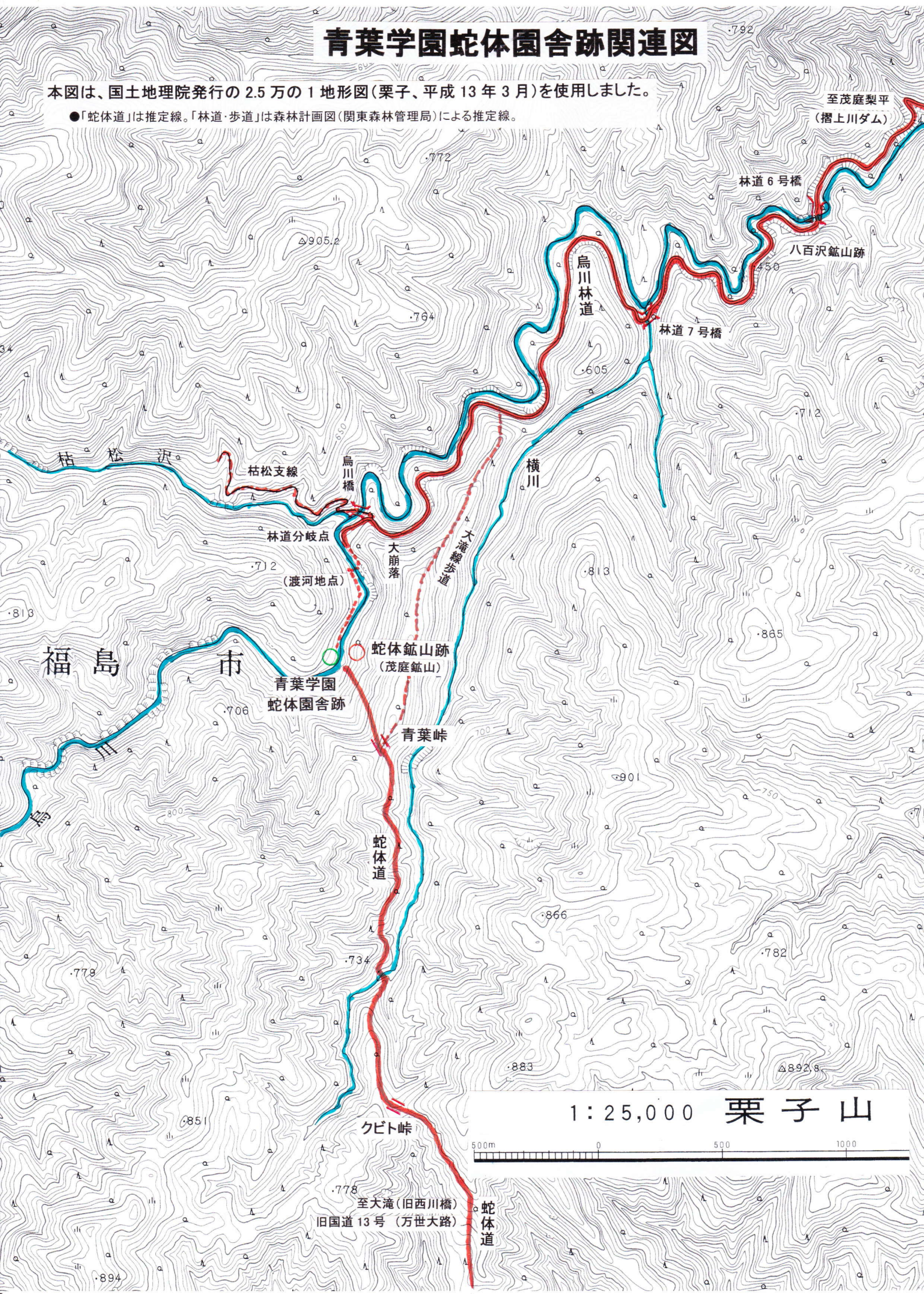
また、大滝会 HP 管理人紺野様にはいつものように編集作業をお願いしました。衷心より感謝申し上げます。

次頁に「青葉学園蛇体園舎跡関連図」を添付する。

青葉学園蛇体園舎跡関連図

本図は、国土地理院発行の2.5万の1地形図(栗子、平成13年3月)を使用しました。

●「蛇体道」は推定線。「林道・歩道」は森林計画図(関東森林管理局)による推定線。



1:25,000 栗子山



至大滝(旧西川橋)
旧国道13号(万世大路)

蛇体道